らっきー・らてぃっしゅ・でーと

1

その河川敷の公園は、早朝や夕方には飼い犬を散歩させる人たちで賑わっている。

散歩している犬たちを見るのが楽しみで、私こと長浜梨花（ながはまりか）は、学校帰りにいつもそこを通ることにしていた。

私は、大の犬好きだった。

それも、小型犬よりも大型犬。首に腕を回して、しっかりと抱きかかえられるようなサイズの。

欲をいえば長毛種がいい。あの、ふかふかの毛皮に頬ずりする幸せといったら。

大きな舌で、顔を舐められるのも嬉しい。

できることなら自分でもゴールデン・レトリーバーかなにかを飼いたいところだけど、両親が二人とも犬を苦手としているため、それは叶わぬ夢。

だから河川敷の公園を通って、散歩している犬たちを眺めることで満足するしかなかった。

――そんなある日のこと。

＊　＊　＊

いつものように公園の中をのんびりと歩いて、芝生の上を楽しそうに駆け回る犬の姿を眺めていた私は、突然、背後からすごい力で突き飛ばされた。

百四十七センチ、三十五キロと、高校二年生としてはずいぶんと小柄な私の身体は、簡単に芝生の上に転がった。倒れたところに、大きな影が覆いかぶさってくる。

「きゃ……」

悲鳴を上げようと開きかけた口に、舌が――それも、妙に大きくて長い舌が押しつけられた。

「……え？」

その大きな舌は、私の顔をぺろぺろと舐めまわしている。

まだ状況が飲み込めていない私の目に、つぶらな黒い瞳が映った。そして、その周りを覆う山吹色の毛皮。

これは……。

ゴールデン・レトリーバー？
私を押し倒したのは痴漢でも強盗でもなくて、一頭の大きなゴールデン・レトリーバーだった。
赤い首輪を付けているから、もちろん飼い犬だろう。
ふさふさの羽根ボウキのような尻尾をばたばたとちぎれそうなほどに振りながら、私の顔を楽しそうに舐めている。
「こら、ラッキー！」
頭の上から、男の人の低い声が聞こえた。
「すみません。うちのバカ犬が……。こら！」
その声の主が引っ張ったのだろう、犬はしぶしぶといった様子で私の上から降りた。
聞き覚えのある声に驚きながら上体を起こし、鼻の上にずり落ちた眼鏡を直す。それから、目の前に立つ背の高い男性を見上げた。
百八十センチを越える長身で、しかも筋肉質だから、こうして低い位置から見上げるとすごく迫力がある。
「上村……くん？」
それは、クラスメイトの上村――上村利雄くんだった。
今年の春、初めて同じクラスになった。これまでほとんど話をしたこともないけれど、席は近くだし、向こうは目立つ外見だからすぐに分かった。
「あれ、委員長か？」
向こうも驚いたような声を出す。クラス委員をしている私は、クラスメイトからは「委員長」と呼ばれることが多かった。上村くんとは特に親しいわけではないから、向こうは私の本名すら知らないかもしれない。
「なにやってんだ、こんなとこで？」
「それって私の台詞……。なに、この子？」
ゴールデンはまた傍に寄ってきて、口の周りを舐めだした。学校帰りにアイスクリームを食べてきたせいかな。
赤い首輪に、小さな金属製のメダルが下がっているのに気がついた。美しい字体で『Ｌｕｃｋｙ』と彫られている。
「上村くん。この子、君の犬？」
口を開けると、長い舌が口の中にまで入ってくる。犬とディープキスしちゃった……なんて馬鹿

なことを考えながら、私は訊いた。
「ああ」
「名前は？」
「ラッキー」
ラッキー……ね、なるほど。
だけどこの子、「ラッキー」というよりも「ハッピー」とでも呼んだ方がいいようなはしゃぎっぷり。もともと、ゴールンデンはどちらかといえば陽気な性格だけど。
それでも、とっても可愛い顔をしている。ゴールデンとしてはかなりハンサムといっていいんじゃないだろうか。
そぅっと首筋を撫でてやると、ラッキーは嬉しそうに目を細めた。

2

あの日以来、私は毎日のようにラッキーと上村くんの散歩に付き合うようになった。

ラッキーには妙に気に入られてしまったし、私もラッキーのことが気に入っていたから。

彼は（ゴールデンとしては）とてもハンサムで、家柄（血統）も良くて、人なつっこくて利口だった。まるで「こんな犬を飼いたい」っていう、私の理想を形にしたような犬。

こんな素敵な犬とお近づきになれる機会、逃すわけにはいかない。

散歩している犬をただ遠くから眺めているよりも、一緒に歩いたり、撫でたり、抱きついたり、顔を舐められたりしている方がずっと楽しい。ラッキーの方が体重が重いから、私が引き綱を持つと、どうしても「犬に散歩させられている」ようにしか見えなかったけれど。

そんな私を見て、上村くんは笑っている。

上村くんは身長百八十センチ以上あって、クラスで一番大きくて、空手だか柔道だかを習っていて、学校ではどちらかといえば無口で。つまり、ちょっと恐い雰囲気の男の子。

必要以上に話はしない。話題はほとんどが犬のことで、あとは学校のことが少し。私もそんなにおしゃべりな方じゃないし、他に共通の話題もない。

だけど私には少し男性不信の気があって。

話題が豊富で女の子に親しく話しかけてくるような男の子はむしろ苦手で。

かえって、上村くんのようなタイプの方が気が楽だった。

そもそも、私の目的は上村くんじゃなくてラッキーなんだし。

それでもラッキーを散歩させているときの上村くんは、学校にいるときよりは少し親しみやすい雰囲気だった。犬に対しては、人間を相手にしているときよりもずっと愛想がいいみたい。

もともと犬には好かれるようで、ラッキーに限らず、よその犬も親しげに彼の周りに寄ってくることが多い。

そんなときの上村くんは、普段よりも優しい表

情をしている……ような気がする。
そのことを本人に言ったら、
「委員長だって、学校にいるときとは雰囲気違うぞ。明るくて」
って言い返された。
「……普段の私って、暗い？」
「暗いってゆーよりも、真面目って感じだな。他の女子みたいに騒がしくないし」
それは否定できない。クラスのみんなに私の評価を訊けば「真面目で優等生の委員長」という答えが返ってくるだろう。まあ、事実だから仕方ないけれど。
同世代の男の子とこれだけ話をしたのは、ずいぶんと久しぶりかもしれない。
自分から男の子に話しかける性格じゃないし、顔はまあ十人並みだと思うけど、チビだし、当然ナイスバディってわけじゃないから、そんなに男の子にもてる方じゃないし。特にもてたいとも思わないし……負け惜しみじゃなくて。
だから最初の出会いから一ヶ月以上、毎日のように一緒に散歩していても、私と上村くんはあくまで「犬の散歩友達」だった。
それ以上の関係を私は望んでいなかったし、上村くんも多分そうだろうと思っていた。それに、ちょっと恐い雰囲気ではあっても、彼はルックスは結構いいから、女子の中には隠れファンも少なくない。その気があれば彼女だってすぐにできるだろう。なのに一人ってことは、つまりその気がないということだ。
だからこそ、気楽に付き合えたのだろう。私を「女の子」として見るような相手だったら、そう簡単に気を許すことはできなかったと思う。
女の子に興味なさそうな上村くんだからこそ、一緒に散歩したり、散歩の後で家に上がって、お茶をご馳走になったりできたのだ。

＊　＊　＊

六月のある日曜日。
ふと思いついて、上村くんの家へ遊びに行ってみた。もちろん、ラッキーと遊びたかったというのが本音。

最近まで知らなかったけれど、上村くんの家はうちのすぐ近くだった。私の足で徒歩五分ってところ。
「こんにちは……って、どうしたの？　その格好……」
一応電話をしてから訪問したんだけど、玄関で私を出迎えた上村くんはよれたTシャツに短パンというずいぶんとラフな格好で、しかもTシャツはびしょ濡れだった。
「ああ、ラッキーを風呂に入れてたんだ。まだ途中だから、上がって待ってろよ」
「うん」
居間に通される。と、いきなり山吹色の固まりが私に飛びついてきた。水飛沫が顔にかかる。
いうまでもなく、全身びしょ濡れのラッキーだ。私の声に気付いて、お風呂場から飛び出してきたらしい。
ラッキーはいつもハイテンションだ。私と会ったときは特に。
いつものようにばたばたと尻尾を振って、私の顔をべろべろと舐めまわす。

可愛い犬にこれだけ好かれるのは悪い気はしないけど、もうちょっとTPOってものを考えて欲しいなぁ。って、犬に言っても無駄か。
おかげで私の服もびしょ濡れになってしまう。
「このバカ犬！　……ごめん、委員長」
「いいよ別に。ラッキーも悪気があったわけじゃないし」
「服、乾燥機で乾かすから。えっと、その間、俺の服でも……」
そう言われたとき、いいことを思いついた。
「あ。だったら、私にお風呂入れさせてくれない？　やってみたかったの」
昔からの夢だった。犬をお風呂に入れて洗ってあげるのが。
服は乾燥機ですぐに乾くだろうから、その間、ラッキーをお風呂に入れてみるのも悪くない。
「まあ、いいけど。けっこう重労働だぞ。ラッキーみたいな長毛の大型犬は」
「ん、頑張る」
上村くんが持ってきてくれた新しいバスタオルを受け取って、私はラッキーと一緒にお風呂場へ

行った。もちろん上村くんは、私が服を脱ぐ前に脱衣所から出ていく。
濡れた服を脱いで乾燥機に入れ、タイマーをセットした。ラッキーのシャンプーが終わった頃には、ちょうど乾いているだろう。
ラッキーの耳に水が入らないように真綿で栓をして、シャワーのコックをひねる。
お湯の温度はかなりぬるめに。
ラッキーは気持ちよさそうにシャワーを浴びている。お風呂やシャンプーを嫌がる犬も多いらしいけど、彼は違うようだ。
置いてあった犬用シャンプーを手に取って、ラッキーを洗い始める。
初めのうちは気楽に考えていたけれど、これは確かに重労働だ。
人間ならシャンプーするのは頭だけだけど、犬の場合は全身なんだから。それにラッキーは大型犬、洗う面積は人間の何倍あるんだろう。それでも、泡だらけで気持ちよさそうにしているラッキーを見ていると、私も嬉しくなった。
慣れていないから、時間は思っていたよりもかかってしまう。シャンプーを嫌がらないラッキーだけど、そのうち退屈になってきたのか、じっとしているのをやめてしまった。
立ち上がって周りの匂いをふんふんと嗅いだり、洗っている私の手を舐めたり。
「こら、ラッキー。おとなしくしてて」
一応、注意する。もちろんラッキーは言うことなんて聞かない。
頭のいい犬だけど、だからこそ、こちらが本気で怒っていないことがわかっている。いつも、上村くんや私や本気で怒るぎりぎりまで、イタズラをやめないのだ。
人間の怒りの度合いを伺うような、小狡い視線がまた可愛い。だから私も本気で怒れない。
ラッキーのイタズラはだんだんエスカレートしていって……。
「きゃっ！　こらっ」
胸を、舐められた。
先端の突起に興味を引かれたのか、大きな舌が乳首を下から舐め上げる。
「や……こらぁ……。そんなトコ舐めたって、

おっぱいなんか出ないよー」
そう言ってもお構いなしに、乳首とその周辺を、ぺろぺろと舐めまわす。
「や……ぁん……、あ……」
犬の大きな長い舌で胸を舐められて、手や顔を舐められるときのくすぐったさとは違う感覚が広がっていく。
じーんと、痺れるように。
その感覚はじわじわと、快感へと変わっていく。
考えてみれば、当たり前だ。
そこは、人間の男の子に舐められたって気持ちのいい部分。それを、大きくてざらざらして、人間よりもずっと器用に動く犬の舌に舐められているんだから。
「や……ぁ……、ん……、んっ……」
いつの間にか手が止まって、私は痺れるような感覚に身を委ねていた。
気持ち……いい。
もともと犬に舐められることは好きだけれど。
それとは違う。
明らかに、性的な快感だった。

「ん……ふ……んっ」
ぎゅと唇を噛んでいないと、声が漏れてしまう。シャワーの水音で、上村くんに聞こえることはないと思うけど。
乳首が、固くなっている。つんと固く突き出して、なおさら舌による刺激を強く受けてしまう。
「あっ……。んっ、んふっ……、ん」
気持ちいい。
とても気持ちがいい。
ずっと、こうしていたい。
もっと舐めてほしい。
身体から力が抜けていく。
我に返ったのは、ラッキーが私の下半身に興味を示したときだ。
胸を舐めるのを止め、ふんふんと鼻を鳴らしながら、女の子の部分に顔を近づける。
「やっ、……こら！　だめ！」
いくらなんでもそれは……まずい。
だけど向こうの方が力が強くて、私の腕力では押し返せない。
「いやっ、そこはだめっ！」

慌ててシャワーを顔にかけると、さすがにラッキーも諦めて離れていった。
ふぅっと安堵の溜め息をつく。
だけど……。
少し、残念かも。
もしもラッキーにあの部分を舐められたら。
やっぱり、すごく気持ちいいのだろうか。
考えただけで、胸がどきどきした。

＊　＊　＊

なんとかラッキーを洗い終えてお風呂から上がると、服はとっくに乾いていた。
「ずいぶん遅かったな。やっぱり大変だったろ？」
そう訊かれて、私は曖昧な笑みを浮かべる。
「あ、はは……まあね」
必要以上に時間がかかった本当の理由は、上村くんに知られるわけにはいかない。だから笑ってごまかした。
「でも、楽しかったよ。……よかったら、またさせてね」
「だってさ。お前はどう思う？」
上村くんが訊くと、ラッキーはぱたぱたと尻尾を振った。
「ラッキーも、またお願いしたいって」
かぁっと、胸の奥が熱くなる。
またラッキーをお風呂に入れて、今日みたいに舐められたりしたら……。
常識で考えれば、それはひどく変態的な行為だけど。
私は少しも、嫌悪感など覚えなかった。
そして、気持ちよかった。
次は、途中で拒めるだろうか。正直なところ、あまり自信はなかった。

3

北国、北海道もずいぶんと夏らしくなってきた、七月のある土曜日の夕方。

私は一人で、ラッキーを散歩させていた。

いつもの散歩にはまだ少し早い時刻に、上村くんから電話があったのだ。

夕方ちょっと用事があってラッキーの散歩に行けないから、代わりに散歩させてやってくれないか、と。

もちろん、考えるまでもなく二つ返事で引き受けた。

散歩が大好きなラッキーが可哀想だし、私もラッキーに会えないのは残念だから。

少し早めに上村くんの家へ行き、ラッキーを預かる。そのまま、いつもの河川敷の公園へと向かった。

河川敷の草むらも、今がいちばん緑の濃い季節。背丈の伸びた草をかき分けて、ラッキーはぐいぐいと私を引っ張っていく。

犬は散歩のコースを自分で決めるものだ、と聞いたことがある。だから、ラッキーの好きにさせておいた。

どのみち私では、体格のいい上村くんとは違い、ラッキーを強引に引っ張ることなどできはしないのだ。

気分屋のラッキーは、同じ河川敷であっても毎日のように歩くコースを変える。今日の目的地は、向こうに見える雑木林のようだ。

私も、小さい頃はそこで遊んだことがある。そんなに大きな林ではないけれど、中に入ると周囲の住宅地とは別世界のようで、踏み分け道は迷路のように入り組んでいて、小川が流れていて、小さい子供にとってはかっこうの冒険の場だった。もちろん、ラッキーにとっても楽しいところだろう。

林の中に入ると、外よりはいくぶん涼しく感じた。どこからか小鳥の鳴き声も聞こえる。

ラッキーはまるで警察犬のように、地面の匂いを嗅ぎながら好き勝手に歩き回っている。

小川のほとりに出たところで、私は立ち止まった。

「ちょっと、休憩」
体力底なしのラッキーや上村くんと違い、私は少し疲れてしまった。
「少しの間、一人で遊んでなさい。遠くに行っちゃだめよ」
そう言い聞かせて、引き綱を外してやる。周囲に人の気配はないし、少しくらいはいいだろう。ここまでずっと、私を引っ張ってきたんだから。
ちょうど、座るのに手頃なサイズの石が転がっていたので、上にハンカチを敷いて腰を下ろした。
モンシロチョウを追いかけているラッキーを目で追う。二十メートルほど追いかけて、危険を感じた蝶が高く上がってしまうと、ラッキーは諦めて戻ってきた。思わず、笑いがこぼれてしまう。
「……君って、狩りの才能はないみたいだね」
きょとんとした表情で私の顔を見ていたラッキーは、突然なにを思ったのか、スカートの中に鼻先を突っ込んできた。
「きゃっ！　こらっ、ラッキー！」
犬の動きは、運動があまり得意ではない私の反射神経が対応できないくらい、速かった。ショーツに、鼻を押しつけられる。
「やっ……ちょっと君、なに考えてるのっ？」
牡の犬が、人間の女性に興味を持つことがあるというのは知っている。下着の匂いを嗅いだり、マウントしてきたり。
ラッキーもやっぱり、年頃の男の子なんだ。
……なんて、落ちついて考えている場合じゃない。
「……だ……め、や……っ！」
いちばん敏感な小さな突起に、鼻先が触れた。身体に電流が走ったみたい。
ラッキーを押し返そうとする手から、力が抜ける。ふんふんと鼻を鳴らして匂いを嗅いでいたラッキーが、ぺろりと、その部分をひと舐めした。
「ひゃっ……ぁん！」
ビクン。
身体が小さく痙攣する。
「や……あっ、……あっ！」
二度、三度。
ラッキーは繰り返し舌を動かす。
その度に、私の唇から切ない声が漏れた。

私の声に誘われるように、舌の動きがさらに激しくなる。
ラッキーの大きな舌が、ショーツの上から女の子の恥ずかしい部分を舐めている。
気持ち……いい。
この前、胸を舐められたときに、あの部分を舐められたらどうなるんだろうって想像していたのよりもずっと。
「はぁ……あっ、あっ！　ラッキぃ……」
いけない。こんなこと。
犬に、女の子のエッチなところを舐めさせるなんて。
それも、野外で。
それがどれほど異常な行為か、わからないわけじゃない。
だけど、抵抗できなかった。
やめてほしくなかった。
他のことが考えられなくなるくらい、気持ちいいから。
異常？　変態的？　アブノーマル？
いいじゃない、そんなことどうだって。

こんなに気持ちいいんだもの。
私の理性のタガは、すっかり外れてしまっていた。
周囲を見回す。夕方の、薄暗くなりはじめた林の中。もちろん誰もいない。
私は意を決した。この機会を逃したら、いつまたこんなチャンスが訪れることか。
ショーツのゴムに手をかけて、僅かに腰を浮かす。
下着を脱いで、丸めてポケットにしまった。
まさか、こんな大胆なことができるなんて。自分でも驚きだった。
「ラッキー……舐めて……」
恋人に甘えるような声で、私はささやいた。
脚を開いて、自分の指でその部分を広げる。
ラッキーが顔を近づけてくる。荒い息がかかる。
「はっ……あぁっ！　あぁん！」
ぴちゃ……。
湿った音は、短い悲鳴にかき消された。
こんな、こんなに、いいなんて。
先刻までの、薄い布越しのもどかしさは全くな

い。
剥き出しの神経を直に舐められているような、鋭い刺激だった。
「はぁっ……ぁっ！　あぁっ！　……んんっ！」
ピチャピチャ、ペチャペチャ。
ラッキーがミルクを飲むときと、同じ音。つまり、私はそれくらい濡れてしまっていた。
長い舌に舐めまわされている。
ラッキーの舌はとても大きくて、長くて、ざらざらしていて。
しなやかで薄いから、ぴったりと張り付くみたい。
その上、人間の舌よりもずっと器用に動く。
舌だけじゃない。
柔らかな毛が、内腿に触れることも気持ちいい。
「あぁっ……あんっ！　あんっ！　は……ぁっんっ！」
すごい。
すごい。
気が遠くなりそう。
ラッキーは一心不乱に舐め続けている。この熱心さも、人間には望めないもの。
「ん、んーっ！　あっ……あぁっ！」
できるだけ声を出さないように、と唇を噛みしめても、津波のように押し寄せる快感に抗えない。
「はぁぁっ……。いい……、いい……っ！　あぁっ！」
私はもう、無我夢中だった。
腰を浮かせて前に突き出すようにして、自分の指で広げて。
もっと舐めやすいように。
もっと奥まで舐めてもらえるように。
舌が、中へ入ってくる。
人間の舌では、到底届かないくらい奥深くまで。
私の身体を、内側から舐めている。
「はぁぁっっ！　あぁぁっ！　あぁぁっ！　あぁぁぁーっ！」
大きく身体を仰け反らせて、私は絶頂を迎えた。
一瞬、気が遠くなる。
……と、座っていた石がぐらりと傾いた。
「ひゃっ……っ！」
そのまま後ろにひっくり返る。スカートがまく

れ上がり、下半身が露わになった。
その衝撃で我に返った私は、真っ赤になってスカートを直すと、慌てて立ち上がる。
「ら……ラッキー、帰るよ！」
意外なことに、ラッキーは素直にその言葉に従った。引き綱を付けると、私の横に並んで行儀よく歩き出す。来るときみたいに強引に引っ張ったりはしない。
私は少し早足になっていた。
恥ずかしいのと興奮とで、頬が紅潮している。
薄暗くなった公園には、まだ少し人が残っていて、私は逃げるようにその場を後にした。
みんなが、私たちを見ているような気がした。
私とラッキーが、林の中でなにをしていたのか知っているような気が。
もちろんそれは気のせい、被害妄想だとわかっているけれど。
慌てていた私は、公園を出てからようやく、下着を着けていないことを思い出したくらいだった。
ラッキーの唾液と私自身のエッチな蜜で濡れたショーツが、スカートのポケットに収まっている。
それが、あの出来事が夢でも妄想でもない証だった。

4

「んっ……ぅん……く……」

くちゅくちゅと、指が湿った音を立てている。

私は裸でベッドにもぐり込んで、自分自身を慰めていた。

あの異常な、そして刺激的な体験からまだ数時間。身体の火照りは治まってはいない。

私の女の子の部分はしっとりと濡れていて、乳首は固くなっていて、ちょっと触れただけで声が漏れてしまう。

家族が寝静まるのを待つ時間が、果てしなく長いものに感じた。夕食後は、部屋で本を読んでいるふりをしながら、ずっと服の上から触っていた。

「はっ……ぁっ、ん、ふぅっ……ん！」

中指を第二関節くらいまで入れて、中をかき回すように動かす。いつもの自慰の時はもっと奥まで指を入れるんだけど、今日は、ラッキーに舐められていた部分を重点的に刺激する。

まだ、あそこにラッキーの舌の感触が残っているようで、すごく感じた。

夕方の記憶を呼び起こしながら、私は指を動かし続けた。中に入れていない方の手は、クリトリスや、割れ目の上を滑らせる。

「はふぅ……あっ……んっ……。くぅ……ん……」

すごく、濡れてる。

中はすごく熱くなって、トロトロにとろけてる。

指を抜くと、白濁した液体が糸を引いて、べっとりと手を汚していた。

普段、自分でするときよりもよりも、ずっと感じてる。

それでもやっぱり、自分の指よりもラッキーの舌の方が何倍も気持ちよかった。

あれは――人間の男の子に舐められるよりも、ずっと気持ちよかった。

そう。

実は私、人間の男の子に舐められた経験はあった。いや、性格には「男の子」じゃない。相手は、私よりもずっと年上だった。

多分、今のクラスメイトは誰も知らないはず。言ったらきっと驚くだろう。「真面目で優等生の委員長」が、バージンじゃないなんて。

私の初体験は、二年前。中学三年生の夏休みだった。

相手は、塾の講師のアルバイトをしていた大学生。

格好良くて、おしゃれで、話が上手で、カッコイイ車に乗っていて。

今にして思えば、かなり遊び慣れた男だった。うぶな中学生を落とすことなど、朝飯前だっただろう。

私は簡単に、彼の誘いに応じた。当時の私は今以上に、自分の「優等生ぶり」にコンプレックスを感じていて、自分を変えたいと思っていたから。

それが、きっかけになると思った。今の自分、つまらない「真面目ちゃん」から脱皮することができる、と。

初めてのデートは、海へのドライブ。

その日のうちに、求められるままに身体を許した。彼は雰囲気作りも上手だった。

向こうにしてみれば、夏休みのちょっとした遊びだったのだろう。

だけど、免疫のない私はすっかり彼に本気になってしまった。年上の大学生と付き合って、セックスして、自分も大人になれたような気になっていた。

夏休みの間、二日と間を空けずに会っていて、その度に彼に抱かれた。どんな要求にも、私は精一杯応えた。彼に喜んで欲しかったから。

ほんの一ヶ月ほどの間に、私はすっかり「女の悦び」を身体に教え込まれて。

そして。

――夏休みが終わるのと同時に、捨てられた。

もちろん、その時はショックだった。

自分がただ、身体目当てで弄ばれていたことを知って、悲しかったし、悔しかった。

だけど今では、意外と落ちついてその時のことを思い出すことができる。

いい勉強をさせてもらった、と思えばいい。

まだ子供だった自分。
精一杯背伸びして、足下をすくわれた自分。
不思議と、彼を恨む気持ちはなかった。当時の自分の愚かさ、幼さがすこし可笑しいだけ。
もちろん、私の男性経験はその一人だけ。以来、男の子と親しく付き合ったことはない。
しばらく男性不信になっていたということもあるし、その後は一度も夢中になれる男性に巡り会わなかった、ということもある。
そして私は相変わらず「真面目で優等生の委員長」だった。
それでも少しは、成長したと思いたい。
精神面がどうかは知らないが、身体は間違いなく、少し大人になっていた。
あれ以来、週に一度は欠かせなくなった一人遊び。一度セックスの悦びを覚えた身体は、どうしてもその快感を求めてしまう。
特に憧れの男性もいない私はいつも、二年前の彼との行為を反芻しながら、自分を慰めていた。
だけどそれは昨日までの話。
今日は、違う。

私を昂ぶらせているのは、一頭の美しいゴールデンレトリーバーなのだ。

「あっ、はっ！　はぁっ……あっ！
はぁうっ！」
荒い息をしながら、指の動きを速くしていく。
中をかき混ぜるように動かすと、熱く濡れた粘膜が指に絡みついてくる。
溢れ出た愛液はお尻の方まで滴って、シーツを濡らしていた。
「あっ……あぁっ……あぁっ……っ！」
ラッキーの舌の感触を思い出しながら、指と、腰を動かす。
人間の舌よりもずっと長くて。
ずっとしなやかで。
ざらざらとした刺激を与えてくれる舌。
信じられないくらい奥まで、舐められてしまった。
信じられないくらい、気持ちよかった。
「あ……はぁ……あんっ！　あっぁんっ！」

気持ちいい。いいけど、やっぱり自分の指じゃ物足りない。
あの舌の感触を、また味わいたい。
また、ラッキーに舐めて欲しい。
相手が犬だからといって、嫌悪感はまったく感じなかった。
犬に舐められるのは……少なくとも相手がラッキーの場合は、すごく気持ちいいのだ。
私は、ラッキーが好きだ。ラッキーも、私のことが好きだ（と思う）。
なにも問題はないではないか。
「あんっ……また、舐めて欲しいよぉ……」
だけど、今日みたいなチャンスはそうそうないだろう。
叶わぬ願いに身を焦がしながら、私は一時間以上も自分を慰め続けた。

＊　＊　＊

疲れてぼうっとした頭は、時に、突拍子もないことを思い出す。
「……そういえばどこかで、バター犬なんて言葉を聞いたことあったっけ」
もしかすると、人には言わないだけで、犬との行為を楽しんでいる女性は案外多いのではないだろうか。
「……調べてみよ」
こんな時でも優等生の血が騒ぐ。わからないことをそのままにはしておけない性分だ。
もちろん、教科書や事典をいくら調べたところで、そんなこと載っていないことくらいはわかっている。
「やっぱり、あれよね」
私はパソコンの電源を入れた。
なにかわからないことがあれば、インターネットで調べればいい。なにより、アダルト関係の情報に関しては、それがいちばん充実している。
こういったことにパソコンを利用するのは初めてではない。いくら真面目ちゃんと思われていようと、私だって性的なことに人並み（それともそれ以上？）の興味はある。海外のサイトの、なんの修正も加えられていない写真を、顔を赤らめつ

つも見入ってしまったことだって……ない、とは言わない。
大手のサーチエンジンにアクセスし、いくつか思いつくキーワードを入力する。
見つかったサイトから、さらにリンクを辿って。
――そして数十分後。
顔を真っ赤にして、夢中でパソコンのモニタを見つめている私がいた。
そこには、衝撃的な画像が映し出されていた。
金髪の美しい白人女性が四つん這いになっていて、背後から大きなグレードデンにのしかかられている。
そして。
その犬の性器が女性の中に深々と挿入されているところまで、その画像にははっきりと映っていた。
「……」
私はしばらく、言葉を失っていた。
今まで、思いもしなかった。
犬と人間が、セックスできるなんて。
だけど、目の前に映し出されている何枚もの画像では、紛れもなく種の異なる動物が結合していた。しかも女の人は、さも気持ちよさそうに恍惚の表情を浮かべてさえいるのだ。
見つけたのは、画像だけではなかった。
動物と人間とのセックスを題材とした小説も、いくつもあった。
私は夢中で読みふけった。
さらに興味深いものも見つけた。『女の子のための獣姦講座』というタイトルのそのページでは、牡犬とのセックスについて詳しく解説されていた。
それがどんなにいいものであるか。
実際にどういう風にすればよいのか。
そして、様々な注意点まで。
一字一句暗記するくらい、何度も繰り返し読んだ。
もしかしたら私も、ラッキーとセックスできるのかもしれない。
そう考えただけで、興奮する。
動物と……犬とのセックス。人の道を外れた行為かもしれない。だけど……だからこそ、興奮してしまう。

なにより、私はラッキーのことが大好きなのだ。ラッキーだって、私相手に欲情しているはず。
とはいえ、それが簡単に実現できるとは思っていない。今日みたいにラッキーと二人きりになるチャンスもそうそうあるわけではないし、さすがに屋外でそんな行為に至るのは無謀すぎるから。
当分は、ラッキーとのセックスを空想しながら自慰を楽しむことになるのだろう、と。そう思っていた。

――だけど。
チャンスは、私が考えていたよりもずっと早くにやってきたのだった。

七月。
夏休みも目前に迫ったある日のこと。
「委員長って、八月の第一週に予定あるか？」
いつものように夕方の散歩をしている途中、上村くんに訊かれた。
「え？　……別にないと思う……けど？」
「無理に、とは言わないけど。迷惑じゃなかったら、一週間くらいラッキーの世話してくれないか？」
「え？」
「家族で、旅行に行くから……」
なるほど。旅行の間、ラッキーの餌や散歩の世話を頼みたいのだろう。まだまだ、ペット同伴で泊まれるホテルとなると限られてしまう。
「旅行って、どこへ？」
「沖縄」
「沖縄かぁ、いいねー。うん、いいよ。ラッキーの面倒は私が見るから」
私は内心、飛び上がりたいくらいに喜んでいた。だけどそれが顔に出ないように気をつけて、何気ない風を装って応える。
「サンキュ。ラッキーも、ペットホテルなんかより気心の知れた委員長の方がいいだろうし。家の合鍵渡しておくから、エサと散歩、頼むわ」
上村くんにしても、大切なラッキーを知らない人に預けたくはないのだろう。
「ん、まかせて」
できるだけ自然にうなずこうとしたけれど、どうしても顔がにやけてしまう。
なんという幸運だろう。
ラッキーと二人きりになる機会なんてそうそうないだろうと思っていたのに。
まさか、こんな素晴らしいチャンスが訪れるなんて。
上村くんの家で、誰にも邪魔されずに一週間も一緒に過ごせる。
あの、めくるめく快感を存分に味わうことができる。
そう考えただけで、上村くんの前だというのに濡れてしまいそうだった。

「嬉しそうだな」
「え？」
ギクッ！
上村くんてば、意外と鋭い。
「そ、そうかな……。それよりも、ちゃんとお土産買ってきてね」
私は必死に話題を逸らした。

＊　＊　＊

「面倒なこと頼んで、ごめんなさいね」
そう言ってぴょこんと頭を下げた上村くんのお母さんは、小柄でぽっちゃりとした可愛い感じの人で、上村くんとはあまり似ていなかった。それをいったらお父さんも中肉中背で、体格のいい上村くんとは似ていない。
だけどＯＬをしているというお姉さんは、背の高い、ややきつい顔立ちの美人で、上村くんと似た雰囲気がある。この姉弟は隔世遺伝なのかもしれない。
「トシってば、ずいぶんと可愛らしい彼女掴まえたじゃない？」
お姉さんが上村くんの背中を小突いて、からかうように言う。
なにか誤解されているみたいだけど……まあ、いいか。確かに「ただのクラスメイト」に、一週間もペットの世話を頼むなんて考えにくい。
あからさまに否定するのもどうかと思って、私はただ、曖昧な笑みを浮かべていた。

ラッキーと並んで、一家四人を乗せて走り去る車を小さく手を振りながら見送る。角を曲がって視界から消えたところで、私はラッキーを見た。
ラッキーも、私を見ている。
なんとなく、笑っているような表情で。
私の口元も緩む。
心が、通じ合ったような気がした。
「……したい？」
小さな声で訊く。
ラッキーが尻尾を振る。
私も、したい。

上村くんたちが出掛けてすぐにそういうことを始めるというのも、なんだか気恥ずかしいものではあったけれど、もう待てない。
早くラッキーと二人きりになって、楽しいことしたい。
「行こ」
私はラッキーを促して、家の中に入った。

＊　＊　＊

何度か入ったことのある、上村くんの部屋。
パソコンを載せた大きめの机に、スチール製の本棚に、セミダブルのベッド。
テレビとビデオデッキとゲーム機。
壁にはポスターが二枚。Ｊリーガーと、水着のアイドル。
多分、高校生の男の子としては、平均的な部屋なのだろう。
私がベッドに腰掛けると、間髪入れずラッキーが飛びついてくる。私よりもラッキーの方が体重が重くて力も強いから、簡単に押し倒されてしまう。
「や……、ラッキー、慌てないで……」
マウントしてくるラッキーを押しのけてなんとか上体を起こし、首に腕を回した。
「あんまりせっかちだと、嫌われるぞ。女の子には、ムードが大切なんだから」
耳元でささやいてから、キスをする。キスといっても犬相手では「唇を重ねる」って感じじゃなくて、お互いの口や舌を舐め合う形になる。だけどこれはこれで、けっこう気持ちいい。
「服脱ぐから、ちょっと待って」
一度ラッキーから離れた私は、カーテンを閉めて手早くシャツとスカートを脱ぐ。
ブラジャーも外して、最後に小さく深呼吸してから、ショーツを下ろした。
「……お待たせ」
全裸になってベッドに座る。おずおずと脚を開くと、すぐにラッキーが顔を押しつけてきた。
「は……ぁんっ！」
舌が触れる。
長くて、しなやかで、とても器用に動く舌。

人間の男の子や自分の指では経験したことのない、至上の悦びを与えてくれる舌。
「はぁっ……、あぁぁ……、あぅんっ！　あんっ！」
ぴちゃぴちゃ、ぴちゃぴちゃ。
リズミカルに、人間には真似のできない速い動きで、割れ目全体を舐め回す。
電流のように身体を貫く快感に、上体が仰け反る。どさりと仰向けになった私は、ラッキーの動きに合わせるように小刻みに腰を動かした。
「あぁっ！　あぁっ！　いい……いいっ！　はぁぁ……もっと、もっと……」
前回と違い、今日はいくら声を出しても平気。私はなんの遠慮も恥じらいもなく喘ぎ、おねだりする。
ラッキーはそれに応えて、さらに舌の動きを加速する。
「はぁぁっ、あぁっ、んんぅっ、くっ！　はぁんっ！」
下半身が、とろけていくみたい。
おびただしい量の蜜が、身体の中から溢れ出すのを感じる。ミルクを飲むときのように、ラッキーの舌がそれをすくい取る。
「美味しい？　ね、私の……美味しい？　もっと舐めて」
脚をいっぱいに開いて、舌をできるだけ奥まで導き入れようとする。
同時に、私は両手で自分の胸を包み込んだ。
掌の中で柔らかく潰れる胸の感触が心地よい。腰の動きに同調するように、乳房全体をこね回す。
「はぁっ！　はぁっ！　はぁぁっ！　あぁぁんっ！」
気持ちいい。
気持ちよくて気持ちよくて……おかしくなっちゃいそう。
まだ、始めて何分にもなっていないはずなのに、今にもいってしまいそう。
もう……だめ。
もう少し我慢しようかとも思ったけど、とっくに限界を超えている。このままいっちゃうしかない。
「んんっ！　あぁっ！　あぁぁっ！　はぁぁっ、

あぁぁぁ……ああっっ！」
一瞬、全身が痙攣する。胸に、痛いくらいに指がめり込む。
背中を浮かせて大きく身体を仰け反らせて、やがて力が抜けてどさりと落ちた。
「あぁ……はぁぁ……」
私の、女の子の部分で爆発した快感が、全身に拡散していく。その余韻に身も心もとろけながら、大きく息を吐き出した。
あっという間に達してしまった。
こんなに短い時間でいってしまったのは初めてだ。
この前、ラッキーに舐められたときよりもさらに早い。あの時は初めてだったし野外だったから、必要以上に緊張していたのだろう。
今日は本当に、なんの歯止めもない状態だった。
「……最……高……素敵よ、ラッキー」
だけどラッキーは、私がいってしまったことなど気付いていないかのように、まだ舌を動かし続けている。溢れ出してくる白濁した蜜を、一滴残らず舐め取ろうとするかのように。

「あ……ちょ……と……。待っ……あぁっ！」
ラッキーは待ってはくれない。疲れることを知らないその舌は、かつてないほどの絶頂を迎えて余韻に浸っていた私に、すぐまたスイッチを入れる。
まだ回復しきっていないのに、強引に感じさせられてしまう。
「やん……ラッキー……、や……んっ！　んんっ、あぁん！　うぅっんっ！」
こんなにすぐに、二回目なんて。
なのに、こんなに感じちゃうなんて。
「やぁぁっ！　あんっ！　あぁん！」
私ってば、ものすごい淫乱になってしまったみたい。
だけど心の奥底ではどこか、そんな自分に酔ってもいる。
もっといやらしいこと。
もっと恥ずかしいこと。
もっと気持ちいいことしたい。
自分の指で広げて、奥の奥まで舐めてもらう。
はしたない声を上げて。

激しく腰を振って。
「あぁ……う……っ！　……あっ――――――っ！」
最後はもう、声にならなかった。
一度目の絶頂からほんの数分で、私は今日二度目の、そしてもっと高いところにある頂に達してしまった。

「や……ん……ラッキー……だめぇ……」
ぴちゃぴちゃ、くちゅくちゅという湿った音は、まだ続いている。
ラッキーはその行為をやめるどころか、いっそう熱心に舐め続けている。
荒い息づかいが聞こえる。
「そう……だよね……。私ばっかり、気持ちよくなってちゃ、ダメよね」
普段はほとんど身体の中に隠れているラッキーのペニスが、大きく勃起している。それは赤い、肉の色をしていた。
「ラッキーも……気持ちよくしてあげなくちゃ」
私の身体はまだ全然回復していなくて、まるで力が入らなかったけれど、なんとか身体の向きを変えて俯せになる。
舐めてもらうだけじゃなくて、ラッキーと本物のセックスをする。そのことには少しも抵抗を感じなかった。
そうするのが当たり前のように、ちゃんと犬と同じく四つん這いになって。
「……いいよ。ラッキー、来て」
お尻を小さく振って、ラッキーを誘う。
ラッキーはすぐさま、私の上にのしかかってきた。
私の胸のあたりを抱える前足は、驚くほど力が強くて苦しいくらい。
身体が、揺れる。ラッキーが激しく腰を振っている。
荒い息が、うなじにかかる。
ペニスが何度もあそこに当たる。だけどめちゃくちゃに腰を動かしているので、なかなかうまく入らない。これが人間の男の子なら、ちゃんと入ってから動きはじめるんだけど。
「あ……、ん……」

この状態は、私にとっても拷問だった。
今にも入りそうで、入らない。焦らされて焦らされて、たまらなくなる。
「あん……、やぁん」
私は片手を伸ばして、そっとペニスに添えた。
涎を垂らして今か今かと待ちこがれている、私のエッチな口へと導いてやる。
「あ……んっ、あぁんっ！」
ぬるり……と、入った。
男性器を受け入れるのは二年ぶりなのに、意外なくらいスムーズに入ってきた。ラッキーの舌でいやというほど愛撫されて、奥の奥まで濡れそぼっていたためだろうか。
「はぁっ！　あっ、あっ、あぁっ！　あぁん！」
ラッキーは激しく腰を振っている。すごく速い動き。
切ない悲鳴が漏れる。
こんな動きで膣壁を擦られたら、とても正気でいられない。
「あ……っ、あっ、あぁっ……あぁっ！」
私の中で、ラッキーが大きくなっていく。

それは最初、親指より少し太いくらいだったはずなのに、今は間違いなく、もっと大きく膨らんでいる。
「すごいっ……、すごいっ、イイの……。あ……あ……っ！」
腕で身体を支えるのが辛くなって、私は枕の上に突っ伏した。膝を立ててお尻だけを高く突き上げた格好で、ぎゅっとシーツを握りしめる。
信じられない。
私ってば、犬とセックスしている。
ラッキーと、一つにつながっている。
それは信じられないくらいにエッチで、変態的で。
そして最高に気持ちいい行為。
「ラッキー！　あぁ！　ラッキー！」
私の中で、ラッキーが暴れている。いつもと同じ、やんちゃぶりだ。
「あぁっ、ラッキーも気持ちいいの？　ね、私の……気持ちいい？」
恥ずかしい四文字言葉を口にしながら、私はふと思った。

ラッキーは、初めてなのだろうか。だったら嬉しいな、と。
私、ラッキーの初めての女の子になりたい。
「あぁんっ！　あっ！　……あぁっ！
はぁぁっ、……ぁん……ん？」
ラッキーの動きはだんだん小さくなって、ぐいぐいと腰を押しつけてくるようになった。
なにか、大きくて丸いものがあそこに当たる。
それが膣口を広げて、中に入ってこようとしている。
「……あ」
それがなんであるか、思い出した。
コブ、だ。
犬科の動物は交尾の時、ペニスの根元が瘤状に丸く膨らむのだ。
それが膣内に入って栓の役目をし、途中で抜けたり、精液が漏れたりするのを防ぐ。
以前、動物もののＴＶ番組で、キタキツネの交尾のシーンを見たことがあった。後ろ向きにつながって、牡が牝を引っ張るようにしているのに抜けないのが不思議で「キツネの牝って、そんなに締まりがイイのかな？」なんて馬鹿なことを考えたくらいだ。
その秘密が、コブだった。大きくなった時のコブの直径はペニスの何倍もあるから、一度入ったら滅多なことでは抜けない。
（どうしよう……かな）
コブまで中に受け入れてしまうかどうか、少し悩む。
正直なところ、少し怖い。実際、犬とセックスする女の人でも、コブまでは入れない人も多いらしい。
インターネットで見つけた、犬とのセックスの画像を思い出す。コブは、握り拳くらいに膨らんでいた。
あんな大きなものが入るのか……という不安もある。だけど入口さえ通り抜けてしまえば、膣の中は意外と伸縮性があるものだ。
コブがまだ膨らみきっていない今なら……。
犬とのセックスの仕方を説明していたサイトには「犬とのセックスの真の楽しみは、このコブだ」なんて事も書いてあった。

それに、ラッキーのすべてを受け入れたい、という思いもある。犬同士の交尾は当然コブまで受け入れるのだから、私もそうすることで、初めてラッキーと一つにつながったといえるのではないだろうか。

（……よし！）

私は決心した。

最後まで、結合しよう。

すべてを受け入れよう。

私は小さく深呼吸すると、下半身に手を伸ばした。

片手で、自分自身をいっぱいに広げる。もう一方の手でペニスの根本を握って、コブを押しつける。

「ん……ぅ……んんっ！　くっ……ぐ、ぅぅ……んあっ！」

大きな塊が、無理やり中に入ってこようとしている――そんな風に感じる。決して広いとはいえない膣口が、広げられていく。

やっぱり痛い。ふと、初めての時の痛みを思い出した。

あの時に似ている。あの時も、こんな大きなもの絶対に入らない、と思ったけど。

それでも結構、なんとかなるものだった。

だったら、今回だって。

歯を食いしばって、コブを押す手に力を込める。

「いっ……くっ、ぅんっ！　うぅぅ……ぐぁ……あ……っ！　いっ、痛ぁ……ああ……うあぁぁぁ――――っっ！」

私は悲鳴を上げた。

本当に、裂けてしまうかと思った。

涙が溢れ出す。

ほんの一瞬、膣口は限界を超えるくらいに広がった。

ずるり……と、信じられないくらい大きな丸いものが、そこを通り抜ける。

「あぁぁ――っ！　あぁっ！　はぁぁぁ……っ」

コブが完全に中に入ってしまうと、ずいぶん楽になった。やっぱり入口よりも、中の方が伸縮性がある。コブの根本はまた普通のサイズだから、これで一息つける。

……と思ったのが甘かった。

痛みは急速に薄れつつあったけれど、それに代わって津波のような快感が押し寄せてきた。
考えてみれば当然のことだ。根本まですっかり入ってしまったことで、ラッキーのペニスは私の中をいっぱいに満たしている。
しかも、膣というのは奥よりも入口近くの方がずっと敏感で。
その部分で、大きなコブが限りない存在感を主張しているのだ。
「う……あぁ……あぁぁ……。ラッ……きぃ」
身体が震える。そのわずかな動きだけでも、コブでいっぱいに広げられた膣壁には強すぎる刺激だった。
なんという快感だろう。
気が遠くなる。
ラッキーは、もう先刻みたいに激しく動いてはいない。
コブまで入れてしまうと、牡犬は動きを止めるものらしい。
その方がいい。この状態であんなに激しく動かれたら、私、本当に壊れてしまう。

これで十分すぎる。ほんのちょっと動いただけで、大きなコブが膣壁を刺激する。
「はぁっ！　……あっ！　……あぁぁっ！
……あぁぁ――っ」
ちょっと動いては悲鳴を上げ、しばらくじっと休んで、またちょっとだけ動いて。
そんな動作を繰り返す。
どんどん、快感のレベルが高まっていく。
動きを止める時間が少しずつ短くなって。
腰の動きがだんだん大きくなって。
それに比例するように、私の声も大きくなっていく。
「あぁっ……うぅん！　んんっ！　あっ、あぁっ！　はぁぁ……あぁっ！　す……ごい……死んじゃう……。あっ、私ぃ……死んじゃうよぉ……あぁぁぁんっ！」
熱い。
熱い液体が、流れ込んでくる。
ラッキーの精液。
感じる。
私の中に、びゅっびゅって噴き出してくる。

すごく熱く感じる。犬の体温は、人間よりも高いから。
膣の中はペニスとコブで一分の隙もないくらいに満たされているから、行き場のない精液は子宮へと流れ込んでくる。
信じられないくらい、量が多い。
牡犬は、挿入している間ずっと射精を続けるのだそうだ。人間は貯めておいた精液を一瞬で射精するだけだけど、犬はセックスしながら精液を作って、それを絶え間なく放出するのだという。
その量は、人間の何倍にもなる。
私の胎内に、絶え間なく放たれる精。
普通なら溢れ出しそうなほどなのに、大きなコブが栓をする形になっているから、大量の精液は一滴の無駄もなく子宮に注ぎ込まれる。
「あ……あ……あぁぁ……。あ、私が牝犬だったら、絶対妊娠しちゃう……」
犬科の野生動物の、一回の交尾による妊娠の確率は、百パーセントに近いと聞いたことがある。
今なら、それが納得できる。
これだけの量の精液で、子宮を満たされてしまうのだから。
それに、野生動物の牝が発情するのは、基本的に排卵期だし。
実は、今日の私もそう。
人間の男の子相手だったら、もろ危険日。
だけどラッキーが相手なら、妊娠の心配は万に一つもない。
「ふふ……犬とのセックスって、こーゆーメリットもあるんだね……」
とはいえ、それはほんのオマケにすぎない。
そんなことよりなにより。
とにかく、気持ちいいのだ。
人間のペニスでは絶対に味わえない感覚に、私は酔いしれていた。
子宮に注ぎ込まれる大量の精液を感じながら、腰を動かす。
「いいっ！　あぁん！　あぁんっ！　は……あぁっ、あぁぁぁっっ！」
ただただ、欲望のままに。
一番感じる部分を探りながら、腰をくねらせる。
どう動いても気持ちいい。

どんどん、どんどん、高みに昇ってゆく。
私は枕に顔を埋めるようにして、シーツを固く握りしめていた。
だらしなく開いた口からは涎が流れ出し、枕カバーに染みを作っている。
「あぁっ！　んぁぁっ！　あぁっ、あぁっ、あぁぁぁっ！　いいっ……いいぃっ！
うぁぁぁぅあぁぁ――――っ！」
肺の中の空気をすべて絞り出して、絶叫する。
酸欠のためか、神経が焼き切れるほどの暴力的な快感のためか。
視界が急に暗くなって。
そこで一度、私の意識は途切れた。

「は……ぁっ……、はぁ……すご……い……。
あっ……ぁんっ」
失神していたのは、おそらくほんの短い時間だったのだろう。
荒い息をしながら、私は目を覚ました。
全身がひどい倦怠感に包まれている。身体にまるで力が入らない。
当たり前といえば当たり前だ。
今日は立て続けに三度も絶頂を迎えて、しかも三度目はあんなに激しく、異常な行為だったのだから。
だけど……。
まだ、終わっていない。
ラッキーはまだ、私の中に入ったままだ。
大きなコブは外に出ることを拒否するかのように、膣口を塞いでいる。
「ん……あ……ぁんっ、く……ぅん。
ふぅ……ぅ」
確かこの状態は、長いときには三十分とか、一時間とか続くはず。
まだしばらくは、このままだ。
コブが小さくならない限り、私たちはつながったまま。
これも、コブを受け入れるのに決心が必要な理由のもう一つだ。
だけど逆に、それだけ長い時間、何度でも楽しめるともいえる。

一度で十分なくらい、気持ちよかったのだけど。
「う……ん……。あんっ……はぁっ！」
ほとんど休みなしに三度も達してしまった私は、もう疲れ切っていた。なのに、腰が勝手に動きを再開する。
そして、すぐまた快感の波に包まれてしまう。
「あっ、そんなぁっ……どうしてぇ……」
二年前の私は、一度終わったらそれで満足して、あとは静かに抱き合って眠るのが好きだった。続けて何度もするのは、はしたない感じがして好きじゃなかった。
なのに今日の私は、まだ快楽を貪ろうとしている。
「あぁ……んっ！　んんっ……い……いいっ！」
感じてる。
あれだけしたのに、まだ感じてしまう。
私ってば二年前の夏に比べて、すごくいやらしい女の子になっちゃったみたい。
年頃の女の子としては、素直にそれを認めるのには抵抗がある。犬とセックスして悦んでいるというだけで弁解の余地はまったくないのだけれど、乙女ゴコロは複雑なのだ。
だから、言い訳が必要だった。
「……ラッキーはまだ、終わってないもんね。ん……そう、まだ一度目ってことよ。ちゃんと最後まで、してあげなくちゃ……」
そう自分をごまかして、本格的に感じることに専念する。
「あ……んっ！　はぁっ！　んっ、ふっ……んっ！　あぁんっあぁんっあぁんっ！」
一度終わったばかりだから少しは感度が落ちるかと思ったのに、ぜんぜんそんなことない。むしろ、先刻よりもずっと感じやすくなっているみたい。
コブの痛みがまったく気にならなくなったためだろうか。
痛みがなくなって、コブの気持ちよさだけを思う存分感じている。
だから……。
「はぁっ、あぁぁぁっ！　あぁぁあっぁっ、あぁぁぁ――――っ！」
四回目も、簡単に達してしまった。

結局、ラッキーのペニスがその大きさを失いはじめて私の中から抜け出たのは、その後もう一度絶頂を迎えて、今度こそ本当に失神した後だった。

＊　＊　＊

「ん……、ぁ……ん……。や……ぁ」
朦朧とした意識の中で、ラッキーの舌を感じる。
終わったあと、あそこをきれいに舐めてくれてるんだ。
大量の精液と愛液と汗で、ぬるぬる、べたべたになった私のエッチな部分を。
「ん……、もういいよ」
少しずつ、意識がはっきりしてくる。私は目を開けて、ラッキーを呼んだ。
「ラッキー、こっちにおいで」
これ以上舐められたら、また燃え上がってしまいかねない。そんなにしたら、本当に死んじゃうかもしれない。
今だって、動くこともままならないような状態なのに。

「ラッキー……」
ようやくラッキーは顔を上げて、私に寄り添うように寝そべった。裸のまま、そのふわふわの毛皮を抱きしめる。胸に当たる柔らかな毛の感触が気持ちいい。
「えへへ……セックスしちゃったね。わかってるの、ラッキー？　君は、人間の女の子とセックスしたんだよ」
つぶらな黒い瞳が、こちらを見ている。
わかっているのかいないのか、ラッキーは私の鼻をぺろりと舐めた。
「ね、気持ちよかった？　私の……その、お……こ……」
もう一度鼻をぺろり。きっとこれは、肯定のサインなのだろう。そう思うことにする。
「私のこと、好き？」
やっぱり鼻を舐めようとするラッキーに向かって、私も舌を伸ばした。お互いの舌を舐め合うキスを、私たちはしばらく続けていた。

私は疲れ切って、腰が抜けていて。
そのまま裸で眠っていた。
なんとか歩ける程度まで回復したのは夕方で、シャワーを浴びた後でいつものように河川敷へと散歩に行った。
今日は、ラッキーと並んで歩くのがとても恥ずかしかった。
河川敷でよく会う犬の散歩仲間たちとも、まともに顔を会わせられなかった。
そんなことあるはずがないのに、今の赤面した顔を見られたら、今日の日中何をしていたのか、たちどころにばれてしまうような気がしたから。
だから、今日の散歩は普段より少し短めで切り上げた。
私は今日、犬とセックスをした。
本気で感じて、五回もいってしまった。
考えてみれば、それはひどく異常な行為だ。
だけど……。
だからこそ、こんなにも興奮してしまうのだろう。
学校では「まじめな委員長」で通っている私。
上村くんは私のことを「委員長」と呼ぶ。特に仲のいい友達を除く、他のクラスメイトもも。
私は長浜梨花という女の子ではなくて、クラス委員として認識されている。
そんな私が。
犬とセックスして、悦んでいる。
犬に、本気になっている。この、かわいいゴールデンレトリーバーに。
私は、そんな異常な自分に興奮していた。

6

八月上旬のある日、私は初めてラッキーと結ばれた。

その翌日も、また翌日も、毎日毎日ラッキーとセックスした。

早朝、まだ涼しいうちに上村くんの家へ行き、短い散歩の後でラッキーに朝ごはんをあげて。

一度家に帰って自分も朝食を食べて、勉強をして、昼食の後でまた上村くんの家へ行って。

午後はずっと、ラッキーとベッドの中で過ごす。

いっぱい舐めてもらって。

うんと感じさせてもらって。

腰が抜けるまでセックスして、そのまま力尽きて夕方までお昼寝。

夕方涼しくなってから散歩に行って、晩ごはんをあげる。

――それが、毎日の日課だった。

私はすっかり、ラッキーの虜になっていた。

彼とのセックスは信じられないくらいに気持ちよくて、とても興奮する。

私って普段が真面目な分、こういうことがあるとのめり込むたちなのかもしれない。あの二年前の夏だって、ほとんど毎日のようにデートとセックスを繰り返していた。

セックスしている時、私は解放される。真面目な委員長から、ただの牝犬になる。

一切のしがらみのない、自由な時間だった。

ラッキーとの通い同棲生活は、上村くん一家が旅行から帰ってくるまで一週間続いた。

ずいぶん日焼けした上村くんから、珊瑚のイヤリングをおみやげにもらって。

これで、私の夏休みの一大イベントは終わり。

少し寂しい。

この先当分、ラッキーとセックスするチャンスなんてないだろう。これもまた、二年前と同じように一夏の想い出で終わってしまうのだろうか。

笑顔を作っておみやげを受け取りながら「上村くんが冬休みも家族旅行に行けばいいな」なんて考えてしまう。

だけど嬉しいことに、次のチャンスは自分で思っていたよりもずっと早くにやってきたのだ。

＊　＊　＊

夏休みも残り数日となったある日。
私は昼食を済ますとすぐに、上村くんの家を訪れた。
夏休みの宿題を写させてほしい、と頼まれたから。
一週間沖縄で遊んでいた彼は、当然のように宿題なんてまるでやっていない。根が真面目な私は、ラッキーとの愛欲の日々を送りながらも宿題はちゃんと終わらせている。
上村くんがノートを写している間、私はベッドの上でラッキーとじゃれ合って遊んでいた。「写すのまで手伝ってあげるほどお人好しじゃない」って口では言ったけど、少しでもラッキーと遊んでいたかったというのが本音。
もちろん、上村くんが見ている前でエッチなことはできない。だけどキスしたり、抱きつくふりをして胸を押しつけたりするだけでも結構楽しい。
そこへ、電話がかかってきた。上村くんの携帯にじゃなくて、家の電話。
「はい、上村……あ、姉貴？」
どうやら、お姉さんかららしい。ＯＬをしているお姉さんは、中央区で一人暮らしをしていると聞いたことがある。
「え？　ああ、来てるよ。……ああ、仕方ない。持ってってやるよ」
電話を切った上村くんは、面倒くさそうに頭を掻いた。
「ちょっと、姉貴のところに荷物持って行かなきゃならなくなった。多分、一時間半か、二時間くらいで戻ると思うけど……」
「あ……だったら私、留守番してようか？」
「いいのか？」
「どうせ、夕方また来るんだし」
もちろん今日も、夕方の散歩は一緒に行くつもりだった。
私は、心の中で万歳していた。
「君が戻ってくるまで、ラッキーと遊んでる」

「そっか。じゃあ頼むわ」
「別に、急がなくてもいいよ」
散歩の時間まで戻らなくてもいいから、できるだけゆっくりしてきて――とは言わなかったけれど。
私が「留守番してる」と言ったときの上村くん、心なしか嬉しそうに笑みを浮かべたように見えたんだけど、気のせいかな。
上村くんは、私がここにいることが嬉しいんだろうか。
そういえば上村くんって、私のことをどう思っているんだろう。私たちの関係って、いったい何なんだろう。
これまで、深く考えたことがなかった。
毎日のように遊びに来る私のこと、いったいどう思っているんだろう。まさか「ラッキーとの散歩」が口実だなんて思われていないよね。
少なくとも、迷惑そうな素振りを見せたことは一度もない。
そして――
私は、彼のことをどう思っているんだろう。上村くんが出ていった後、ぼんやりと考えていた。
クラスメイト。
ラッキーの飼い主。
外見は少し怖いけれど、不思議と、警戒心を抱かずに一緒にいられる男の子。
そういう意味では、私にとっては少し特別な男の子なのかもしれない。
だけどそれ以上の感情……たとえば恋愛感情を抱いているかといえば、それはない。上村くんよりもラッキーの方がずっと好き。迷うことなくそう断言できる。
だけど、高校生の男女が毎日のように校外で会って、時には家にも上がって……って、傍目には付き合っているように見えるだろう。
上村くんの家族にはそう思われているようだし、夏休みに入る直前「委員長って、最近上村と仲いいよね。付き合ってンの？　ちょっと意外な組み合わせだけど」と友達に訊かれたこともある。
その時は正直に、本当のことを言った。私は犬が大好きで、彼の飼い犬がすごく可愛いから散歩に付き合わせてもらってるだけ。上村くんと付き

合っているわけではない――と。
もちろん「獣姦願望がある」なんてことは口が裂けても言わないけれど。
それでも友達は私の言葉を「まだ、付き合っているわけではない」と解釈したようだった。多分、女子高生としてはそう考えるのが普通なのだろう。
だけど私は、自分の気持ちがわからない。周りがそうやって騒ぐから「ひょっとしてそうなのかな」と思っているだけかもしれない。
第一、ラッキーとセックスしたいという願望はあっても、上村くんと同じことをしたいとは別に思わない。
かといって、もしも二人きりのときに上村くんの方から迫ってきたら……と考えても、別に恐怖感も嫌悪感もない。ただしそれが「そうなってもいい」と考えているためなのか、「彼はそんなことをしない」と信じているためなのかはわからない。
「んー、わかんないや。ね、君はどう思う？」
ラッキーに抱きついて訊いてみても、こっちの話がわかっているのかいないのか、私の顔をぺろぺろと舐めるだけ。
「や……ぁん、くすぐったい！」
本気ではない私の抵抗を無視して、ラッキーがのしかかってくる。
すっかり、その気になっているらしい。もちろん私も、いつでもＯＫなんだけど。
上村くんは「一時間半か二時間で戻る」と言っていた。余裕を見ても、一時間以上は大丈夫。めったにないこのチャンス、逃す手はない。
時間が惜しかったのと、万が一上村くんが戻ってきたときにすぐ誤魔化せるように、服は脱がないことにした。
今日はミニスカートだから、下着だけ脱げば十分だ。胸を舐めてもらえないのは少し残念ではあるけれど。
ショーツを足首まで下ろして、ベッドに仰向けになった。
スカートを腰までまくり上げ、脚を開く。
「……きて」
既に潤いはじめているその部分を指で開いて、ラッキーを誘った。
鼻先が押しつけられる。

ラッキーの冷たい鼻の感触に、身体がぴくりと震えた。
「んっ……ふっ……ん……、あっ……はぁっ！」
ラッキーに舐められて、私はたちまち燃え上がる。
襞に絡みつくような、大きくて柔らかくて、器用な舌。
何度舐められても、いい。
身体中の神経が痺れるようだ。
久しぶりだからか――とはいっても、最後にしてからまだ十日も経っていないんだけど――すごく感じてしまう。
一気に昇りつめていく。
腰を突き上げて、ラッキーの舌を奥へと導く。
「はぁっ！　あぁぁっ！　あんっ！　あぁんっ！　んんん――っ！」
舐められ始めてからほんの数分。
私は、簡単に達してしまった。
「……は……ぁぁ……」
もったいない。こんなに簡単にいっちゃうなんて。
もっともっと楽しみたかったのに。
だけどもちろん、これで終わりじゃない。
そう。まだまだ楽しめる。余韻に浸ってる場合じゃない。
ラッキーが私の上にのしかかってきて、腰を振っている。
私は俯せになって、ラッキーが入ってきやすいように、膝を立ててお尻を上げた。
「あっ！　あぁっ、あぁん！」
ラッキーは、簡単に中へ入ってきた。毎日セックスして、私もラッキーもずいぶん慣れて、上手になっていたから。
機関銃のような勢いで、腰が打ちつけられる
潤滑液は溢れるほどたっぷり分泌されているはずなのに、激しく擦られる膣壁は火傷しそうなほどに熱い。
「あぁっ、あっ、あんっ！　はぁっあぁぁっ！」
私は断続的に、短い悲鳴を上げ続けた。ラッキーの速すぎる腰の動きに、呼吸が追いつかない。
堪らない。
これが欲しくて堪らなかった。

背中に感じるラッキーの重み。
お尻に打ちつけられる腰。
私の中で、むくむくと大きくなっていくラッキーのペニス。
何もかもが、気持ちいい。
「あぁっ、ん……んん、あ……」
コブが、押し付けられている。
私はもう、なにも躊躇うことなくそれを受け入れた。
指で自分自身を大きく広げて、膨らみつつあるコブを中へと押し込む
「んっ……んんっ……あぁぁぁっ！」
何度も経験したことなのに、一番太くなった部分が膣口を通り抜ける瞬間は、やっぱり痛みのあまり悲鳴を上げてしまう。
だけど、その一瞬の痛みすら病み付きになっていた。
私の中に収まったコブが、大きくなっていく。
この時はいつも、お腹いっぱいに膨らんでいくみたいな気がする。大きな丸い固まりが、私の中にあるのを感じる。

腰を少し動かしただけで、頭のてっぺんまで突き抜けるような快感が走る。
「はぁ……あぁぁっ！　うん……んんっ……はぁぁっ！」
気持ちいい。
気持ちよくて、気持ちよくて。
……気が狂いそう。
私は夢中で腰をくねらせていた。その結合部から、少しでも多くの快感を絞り出そうと貪るように。
お腹の中で、射精が始まっていた。
人間のものに比べるとさらっとした感触の熱い液体が、子宮へと注がれている。
「あぁぁっ！　あぁっ…うぅぅっく！　……う、うぁぁぁぁぁっっ！」
子宮が満たされていく感覚の中で、私はたちまち、今日二度目の絶頂を迎えてしまった。
頭の中が真っ白になって、全身から力が抜ける。
ベッドに突っ伏して、大きく深呼吸を繰り返す。
その間もラッキーは私の中に精を放ち続けている。

私の身体の中の残り火は、すぐにまた炎を上げそうな雰囲気だった。こんなに感じてしまったのに、まだ満足しきってはいない。
しかし――
朦朧としていた私の意識に、割り込んでくる声があった。
「あの真面目な委員長が、自分から進んで犬とセックスしてるなんて……」
聞き慣れた、男の子の声。
上村くんの声だった。
「――――っ！」
まさか、そんな。
顔を上げた私の視線の先に、上村くんがいた。
「うーん……。話には聞いても、実際にこの目で見なきゃとても信じられんな……つーか、こうして目の当たりにしても信じられんぞ」
部屋の入り口に腕組みをして立っていた上村くんは、妙に感心したような口調で言った。

上村くんは部屋の入口に寄りかかるように立って、驚くよりはむしろ感心したような、そして少し呆れたような表情でこちらを見ていた。
「かっ、かっ……上村くん、どうしてっ？」
ラッキーに貫かれたまま、私は真っ青になる。
言い訳のしようもない。
ベッドの上に四つん這いになって、ラッキーが背後から乗りかかっていて。
全裸になっていないとはいえ、そんなの少しも慰めにならない。スカートをまくり上げて、お尻が丸出しになっていて、ラッキーとの結合部まで露わになっている。
「はぁ……んっ！」
私とラッキーはまだつながったまま。慌てて離れようとしたけれど、コブが入っていて抜くこともできない。
どうして上村くんがここにいるのだろう。彼が出かけて、まだ三十分にもならないはずなのに。
「本物の獣姦を実際にこの目で見るなんて、初めてだな」
上村くんは笑いながら、ベッドの脇へ来て結合部を覗き込んだ。
「マジで入ってるよ、これ。あの真面目な委員長に、こんなアブノーマルな趣味があったとは……」
「あっ、あのっ、……これはっ、そのっ……」
「……クラスのみんなに言ったら、驚くだろうな」
「い、いやぁっ！　言わないでっ！」
思わず悲鳴を上げる。こんなこと知られたら、もう人前に出られない。
「お願い……言わないで……」
「言わないさ。言ったって誰が信じる？　普段の行いがいいと得だよな」
上村くんはそう言って、私をほんの少しだけ安心させた後、ふと思いついたようにぽんと手を叩いた。
「このシーンをビデオに撮って見せれば、さすがに信じるかな？」
「いやぁぁっ！」

涙が溢れだして、顔中を濡らす。上村くんは、そんな私の反応を楽しんでいるかのようだった。
「冗談だって。それより、まだ途中なんだろ？俺のことは気にせずに、最後まで続けろよ」
「あっ……あぁぁっ！」
ベッドの端に腰掛けた上村くんは、私の腰のあたりに手をかけて左右に揺さぶった。
私の中を満たしているラッキーのペニスが、膣壁を刺激する。コブが、一番敏感な部分に当たる。
「いやぁっ……あっあっ……やぁっ！　やめ……て……あぁぁっ！」
声が、出てしまう。
どんなに堪えようとしても、いやらしい声が漏れてしまう。
上村くんの手が、私の身体を乱暴に揺すっている。
自分で腰を動かすときよりもずっと大きな動きで。
激しすぎる刺激が全身に広がる。
それは、どんなに感じないようにしようとしても、無視することのできない快感。
痛みすら感じるほどに。
無意識に上げる声が、だんだん大きくなっていく。
……だめ。
もう……だめ。
おかしくなっちゃう。
上村くんが見ている目の前で、ラッキーとセックスしているなんて。
こんな……、こんなの……。
どうしていいのかわからない。気が狂いそう。
「あぁっ……いやぁ……やぁ……あぁっ！　……やめ……あぁぁんっ！」
乱暴に動かされて、結合部がぐちゅぐちゅと音を立てる。
流れ出した愛液が内腿を滴り落ちる。
「ふーん。ずいぶん感じてんじゃん？」
「やぁぁぁっ！」
さらに手の動きが大きくなる。私の理性の最後の堰が、一気に決壊する。
「あぁっ！　あぁぁっ！　……だめぇぇっっ！やぁぁぁ――――っっっ！」

――最後まで、達してしまった。
上村くんが……恋人でもなんでもない男の子が見ている前で。
犬とセックスして。
全身を痙攣させて、涙と、涎と、愛液を垂れ流しながら。
私は、絶頂を迎えてしまった。

意識が、朦朧とする。
私はまだラッキーとつながったまま、ぐったりと枕に顔を埋めて、ぐすぐすと泣いていた。
立て続けの、激しすぎるエクスタシーのために全身から力が抜けていたし、恥ずかしさのあまり顔が上げられない。
「か……上村くん……君、どうして……？」
枕に突っ伏したまま、私は蚊の鳴くような声で訊いた。
「どうして、こんなに早く戻ってきたのかって？
当然、いいところを見逃さないためさ」
「――――っ！」

それって……。
じゃあ……知っていたの？
上村くんは、知っていたの？
私とラッキーを二人きりにすれば、こうなることを知っていたの？
どうして……？
顔を上げて上村くんを見る。彼は、笑ってこちらを見下ろしていた。
その笑みには不思議といやらしさが感じられなくて、まるで悪戯っ子のような表情だ。
「不思議か？　俺が、なにも知らないと思った？」
私は、こくんとうなずく。
だって、知っているはずがない。このことを知るのは、私とラッキーだけなのに。
「ラッキーから、聞いたんだ」
「え？」
聞いた……って、ラッキーは喋らないよ。
「今まで内緒にしていたけどね。俺は、犬の言葉がわかるんだよ。委員長が考えているよりもずっと正確に、ラッキーと意志の疎通ができるんだ。

わかりやすく言えば……テレパシーみたいなものかなぁ」
「……っ！　そんな、それじゃあ……」
確かに上村くんとラッキーはすごく仲がよくて、話をしているように見えるときがあった。
ラッキーは上村くんの言うことをよく聞いていた。
それに上村くんは他の犬にも好かれていて、初めて会った犬にも、とても懐かれていた。
それは……彼が、犬と話ができるため。
じゃあ、全部知っていたの？
ラッキーをお風呂に入れてあげたとき、何があったのか。
散歩を頼まれた日、何があったのか。
上村くんが旅行に行っていた一週間、何があったのか。
知っていて、私にラッキーの世話を頼んだの？
「ど、どうしてっ？　君、なにを考えてるの？
……ぁんんっ！」
思わずがばっと起きあがった私は、まだラッキーとつながったままだということを忘れていた。
突然の刺激に腕から力が抜けて、また枕の上に落ちる。
それを見た上村くんが、ぷっと吹きだした。私の頭を、ぽんぽんと叩く。
「委員長、一年生の頃からしょっちゅう、あの河川敷を散歩してただろ？」
「……ぅん」
「ああ、ずいぶん犬が好きなんだなぁ、と思ってた」
「……うん」
「で、ラッキーが委員長のことを気に入ったって言うからね。こいつもそろそろ年頃だし、彼女を世話してやろうかな、と」
「じゃ、じゃあ……」
最初から、仕組まれていたってこと？
ラッキーが私を押し倒したあの日から。
「だけど、こう上手くいくとは思わなかったな。なにしろ牡犬と人間の女の子、どうやってその気にさせるかが問題だと思っていたけど……まさか委員長に獣姦趣味があったとはね。いやいや、人は見かけによらないってホントだな」

「そ、そんなぁ……」
「ラッキーも喜んでるよ。委員長とのセックスは最高、だってさ」
上村くんはそう言うと、また私の腰を掴んで揺さぶった。
こんな状況なのに、私の身体は反応してしまう。
――もしかしたら、こんな状況だからこそ、かもしれない。
「あっ……んんっ！」
「相手が犬でも構わない上、エッチが大好きっていうんだから最高だよな。ラッキーも見る目があるというか……」
「や……ぁあっ！　う……んっあっ、はぁっ！」
「ラッキーの彼女にするなら、やっぱり人間の女の子の方がいいと思ってたんだ。妊娠の心配もないから、去勢手術とか仔犬のもらい手とか、面倒なこと考えなくてもいいし。それに……な？」
「……！」
意味深な笑みを浮かべた上村くんが何を言わんとしているのか、本能的に理解できた。
一瞬、全身の筋肉が緊張する。

「それに、俺も楽しめるもんな」
上村くんはゆっくりと、ジーンズのファスナーを下ろした。
固く反り返った男性器が、鼻先に突きつけられる。
人間の男の人のを見るのは、これが二人目。
それはすごく大きくて、凶悪そうな赤黒い色をしていて、びくびくと脈打っている。
「あ……」
顎を掴まれて上を向かされ、先端が唇に押し付けられる。
条件反射的に、私は口を開けてそれを受け入れた。
「うんっ……んんむ……ん……」
上村くんのペニスが、口中深くにねじ込まれる。
それはとても太くて、熱くて、固い弾力があった。
彼のって、ずいぶん大きいのではないだろうか。
先端は喉の奥まで届いているのに、根本までは口の中に入りきらない。
それが当たり前のように、私は舌を絡ませた。

口をすぼめて、内頬で彼のを締め付ける。
フェラチオ……その行為はもちろん初めてじゃない。
二年前、初体験のその日からくわえさせられ、口の中に射精された。
その時は苦しくて涙が出た。
以来ほとんど毎日、口で奉仕させられた。
しかし当時の私は、肉体的には苦しいはずのその行為が、決して嫌ではなかった。
まだエッチの知識もろくにない私が一生懸命口でしてあげると、彼がとても喜んでくれたから。
少しでも彼に気に入られたかった。
上手になった、と褒められるのが嬉しかった。
あの夏休みに、たっぷりと仕込まれてしまった口技。二年間のブランクがあっても、身体が憶えている。
なにも考えずに、私は上村くんに口での奉仕を続けた。
舌を絡めたり、強く吸ったり。
上村くんが私の意志などお構いなしに強要していることなのに、本当に条件反射のように反応してしまう。
私にはわかっていた。
これを、拒否することなどできないのだと。
だったら、彼の機嫌を損ねないようにするしかない。
そう自分に言い聞かせて、彼のものをくわえ続ける。
上村くんは私の頭を掴んで、腰を前後に激しく動かしている。小柄な私の身体が揺すられて、まだ私の中にあるコブが、新たな快感を呼び起こす。
「ん……ん……んんっ……っ！」
私は今、ラッキーとセックスしながら、上村くんに口を犯されている。
女性器と口とに、同時に挿入されている。
よく考えてみたら、これっていわゆる３Ｐというものではないだろうか。
（３Ｐ……？）
それが、あまり普通ではないセックスの形態であることは知っている。
それを今、自分がしている。
しかも、相手の一方は犬なのだ。

私は、身体の芯がかぁっと熱くなるのを感じた。
信じられないくらい、異常な行為をしている。
その事実を認識することによって、私の快感はさらに高められていった。
「んんっ……んっ……んんんっ……っ！」
口いっぱいに、上村くんを頬張って。
あそこは、ラッキーに満たされて。
私は無我夢中で首を振り、腰をくねらせていた。
二人を、もっともっと感じさせようとして。
それによって、自分自身がもっと感じようとして。
激しく動いていることと口を塞がれていることで、私は酸欠になりかけていた。
頭が、ぼぅっとしてくる。
「意外だ。委員長ってフェラ上手いじゃん」
そんな上村くんの声が、遠くに聞こえる。
もう、なにも考えられない。
ただ狂ったように、舌と腰を動かす。
昇りつめていく。
高く、高く、どんどん高く。
「んんーっっ！　んんっ……んっ……んぅっ！」
ラッキーの熱い精が、子宮へと流れ込んでいる。
口の中のものが、びくんと大きく脈打つ。
一瞬、頭の中でなにかが爆発したように感じた。
どろりとした、粘りけの強い液体が口中にほとばしる。
目の前が暗くなって。
私はそのまま、気を失った。

＊　＊　＊

「ん……、ふ……ぅ……ん……？」
意識が戻った私は、全裸でベッドに横たわっていることに気がついた。
どのくらい失神していたのだろう。もう、ラッキーとつながってはいない。
代わりに、裸になった上村くんが隣に座っていて、私の胸を乱暴に弄んでいた。ラッキーはベッドの脇に座って、つぶらな瞳で私たちを見つめている。
「委員長って、華奢に見えるけど着やせする方なんだ」

大きな、少しごつごつした手が、私の乳房をこね回している。
「Cカップくらいはありそうだな」
「や……ぁ……」
やだ、私ってば。
私の、エッチな身体ってば。
あんなに激しく、しかも休みなく四回もいったのに、また感じ始めている。
軽くつねられ、引っ張られた乳首が、つんと固く立ち上がる。
股間をぐっしょりと濡らしているものは、流れ出したラッキーの精液なのか、それとも、私自身のエッチな蜜なのだろうか。
「さて、そろそろいいか？」
「え？」
「ちゃんと、牝犬らしい格好しろよ。委員長」
「あ……」
なにを言われているのか、すぐに理解した。顔が微かに強張る。
当たり前だ。この状況で、口だけで許されるはずがない。

私は、上村くんに犯されるのだ。
なにを要求されているのか頭では理解していても、すぐには従えずに私がぐずぐずしていると、上村くんは私の脚を掴んで、乱暴にひっくり返した。俯せになった私の腰に手をかけて引っ張り、お尻だけを高く突き上げるような姿勢にする。
それは先刻、ラッキーとしていた時と同じ格好だ。
「や……ぁ、いやぁ……」
もちろん、そんな私の声は無視される。
なにかが、あの部分に触れた……と思った瞬間。
「あぁぁっ！　あぁぁ――――っ！」
一気に、私の中に入ってきた。
予想外の乱暴な挿入に、私は悲鳴を上げた。
大きい。
すごく太い。
固くて。
とても、熱い。
一番深い部分を、ずんずんと突かれる。
「あぁぁっ！　いやぁっ！　あぁっ、やぁぁっ！　あぁっ……あぁぁ――っ！」

激しすぎる。
挿入直後のラッキーにも負けないくらいの速い抽送に、繊細な膣の粘膜が悲鳴を上げる。
「はぁぁ――っ！　あぁぁっ、あぁぁぁっっ！　だめっ、だめっ、だめぇぇ――っ！」
私、感じてる。
二年ぶりの人間の男の子を相手に、あの時よりもずっと感じてる。
どうして？
こんなの、変。
恋人でもなんでもない相手に、乱暴に犯されているのに。
二年前は、向こうは遊びでも私は本気で好きだった。恋人のつもりだった。
なのに、今の方が感じてる。
上村くんなんて――
私を牝犬扱いするような男に、犯されているのに――
なのに。
なのに。
「ひっ、いいぃっ！　やぁっ！　はぁぁっ！　あぁんっ！　あぁぁっ！　あぁ――っ！」
身体は、これ以上はないってくらいに反応している。
奥までずんっと突かれるたびに、短い悲鳴を上げている。
痛みのためじゃない、歓喜の悲鳴。
「コブまで入れて悦んでるくらいだからガバガバかと思ったら、すっげーイイ締まりしてんな。気持ちイイや。ラッキーが夢中になるのも当然だな」
少しうわずった声で上村くんが言う。
腰の動きがさらに激しくなる。
「委員長、まさか、ラッキーが初めてじゃないよな？」
「んっ……あぁっ……ち、違う……」
「いくらなんでもそこまでアブノーマルじゃないか。でなきゃコブ入れるのは無理だよな。見かけによらず経験豊富なんだ」
「あぁっ……あっ、むっ……違う……よぉっ！　ひっ、一人だけ……んぁっ！」
そりゃあ私は、犬とセックスして喜んでいる変

態だ。だけど、遊んでいる淫乱女と思われるのは我慢がならない。
「じゃあ、そいつにずいぶん仕込まれたのか？　フェラは上手いし、こんなに腰は使うし」
「あぁぁ――っ！」
言われて気付いた。言われるまで気付いていなかった。激しく腰を振っていたのは、上村くんだけじゃないということに。
いつの間にか私も、上村くんが突いてくるのに合わせて、大きく腰を振っていた。
気持ちいい。
どうして、こんなに気持ちいいの。
ラッキーが見ている前なのに。
「やぁぁっ……っ！　いやぁっ！　あぁんっ！」
私は、恋人の前で他の男に犯されているような心境だった。
それってつまり、スワッピングかいうものだろうか。
私、興奮してる。
すごく感じてる。
認めないわけにはいかない。上村くんのペニスは、すごく気持ちいい。
ラッキーのももちろん最高だけど、犬と人間では、ずいぶんと感じが違うのだと知った。
ラッキーのペニスは……そう、熱い液体でぱんぱんに満たしたゴムのチューブみたい。
上村くんのはもっと、硬い芯のようなものが感じられる。すりこぎに薄いゴムの膜を被せたような、ちょっとごつごつした感じがする。
それぞれ膣が受ける感覚はずいぶん違うけれど、どちらも同じように私を狂わせる。
「あぁっ！　あぁぁぁっん！　あぁぁんっ！　あぁっんっ！」
「くぅっ、ラッキーは幸せ者だな。初めての相手がこんな名器で、しかもテクニシャン！」
私のお尻を掴んでいる手に、ぎゅっと力が込められる。
激しく打ちつけられる腰の動きが、一段と大きくなる。
「あぁぁっ！　いいぃっ！　イクぅっ！　イっちゃうぅ――っ！」
「いいのか？　委員長、もういきそうか？　ほ

らっ、いけよ！」
　言葉に合わせて、長いストロークが最奥まで打ちつけられる。
　ただでさえ大きな上村くんの分身が、私の一番深い部分で一瞬膨らんで……弾けた。
　少しずつ流し込まれるラッキーのものと違い、爆発するみたいに一気に噴き出してくる。
「あぁぁっ！　いぃっ、くっ……あぁぁんっ！　あぁぁぁん！　やぁぁぁ――――っ！」
　全身を痙攣させて、絶叫する。
　体内に残った力をすべて費やして、私は今日五回目の……そして一番の絶頂を迎えた。

＊　＊　＊

「は……ぁ……はぁ……あ……あぁ……」
「ふぅ――っ」
　酸素を貪っている私の横で、上村くんが満足げに大きく息をついた。それから身体の位置をずらして、だらしなく開いた私の口に、いくぶん大きさと固さを失ったペニスを押し込んでくる。
　しかし行為を続けようというつもりではないらしい。ペニスを汚している粘液を私の舌が舐め取ると、それだけで離れていった。つまり上村くんは私を牝犬扱いしているだけではなく、ティッシュペーパー扱いもしているわけだ。
　私の……は、ラッキーが身を乗り出してきれいに舐めてくれている。さすがにもう、私の身体はなにも反応しなくて、ただぼんやりとベッドに横たわっていた。
「いやー、よかった。生の獣姦なんか見た直後のせいかな、すっげー興奮した」
「……」
　私は黙っていた。頭の中がぐちゃぐちゃだった。
　上村くんの手が、肩のあたりをぽんぽんと叩く。
「これからも、ラッキーと一緒に楽しませてもらうぞ」
　のろのろと身体を起こした。
　これから、どうなっちゃうんだろう。
　考えたくはないけれど、だいたい想像できる。
　きっと、上村くんの性欲処理女にされちゃうんだ。

好き放題に犯られまくって。
ううん、きっとそれだけじゃ済まない。
写真やビデオを撮られて売られたり、お金のために無理矢理援助交際させられたり……。ひょっとしたら、風俗のお店で働かせられるのかも。
どんどん、考えが悪い方に向かってしまう。
（……やだよ……そんなの）
だけど、どうしようもない。
犬とセックスして悦んでいる変態女だって知られちゃったんだもの。
何をされても、逆らえない。
こんなこと学校で言われたら、私、もう生きていけないもの。
ううん。それだけじゃない。
上村くんに逆らったら、ラッキーに会えなくなっちゃう。ラッキーにしてもらえなくなっちゃう。
どうしよう……どうしよう……。
考えるほどに、涙が出てきた。
「……お願い……ひどいこと、しないで……」
「ひどい？　どこが？　委員長が悦ぶことしかしてないだろ？」
泣いている私に構わずに白々しく言うと、上村くんは私の乳首を指先でぴんと弾いた。
そりゃあ確かに、今のセックスはすごく感じて、乱れちゃったけど。
抵抗らしい抵抗はしなかったけど。
逆らえないってわかっていてしたくせに。
「委員長、なにか勘違いしてんじゃないか？」
「え、だって……そんな、でも……」
「もしかして、あーんなことやこーんなことされたり、お金のために無理矢理援交させられたり、風俗に売られたりするとか思ってる？」
「え、えっと……ぅん」
上村くんってまさか、犬だけじゃなくて人間の考えていることもわかるんだろうか……そんなことを思いながら、私は小さくうなずいた。
「なに考えてるんだか。委員長ってエッチだな。官能小説とかアダルトビデオの見過ぎじゃないのか？」
からかうように笑う上村くんを見て、私は呆気にとられていた。

だけどあの場合、そう考えるのが普通じゃないだろうか。それとも私ってすごく、考えることがエッチなのかな。でも。
「……だけど上村くん、私のこと、犯したもん」
「当然だろ」
って、胸を張って言われても。
「あんなもん見せられて、何もせずにいられると思うか？　健康な、やりたい盛りの男子高校生が」
だから、そういうこと胸を張って言わないでよ。
「だからって、他の男にさせたりするわけないだろ。俺の話ちゃんと聞いてたか？　委員長は、ラッキーの彼女なんだから」
「え……？」
ラッキーの、彼女？
ラッキーは、上村くんの飼い犬で。
私は、そのラッキーの彼女で？
えっと、それって、つまり……。
「……じゃあ……、えっと。これからもずっと、私のこと……可愛がってくれるの？」
「もちろん。ラッキーと同じように大切にするさ。あ、そうそう」
上村くんが、ふと思い出したように立ち上がる。
「プレゼントがあったんだ。先刻、出掛けたついでに買ってきたんだ」
「……？」
私は戸惑っていた。なんだか、考えていたのとずいぶん違うみたい。
上村くんは、机の上に放り出してあった小さな紙袋を手に取った。近所にあるペットショップのものだ。
「ほら」
袋の中から取り出したものを、私の顔の前に突き出した。
それは、赤い首輪だった。
大型犬用の首輪。多分、ラッキーがつけているのとお揃いだ。
ラッキーのと同じように、金属製の小さなメダルが付いていて、それにはちゃんと『Ｒｉｋａ』って彫ってある。
これが……プレゼント？　私への？
戸惑っている私がなにも言えずにいる隙に、上

村くんは私に首輪を付けてしまった。
「うーん……驚いた。必要以上に似合ってるな」
自分でしておいて、変な感心の仕方をしている。
「……」
どうリアクションすればいいんだろう。
私、人間の女の子なのに。
裸にさせられて、犬の首輪を付けられている。
ちらりと横目で、壁に掛かっている鏡を見た。
一糸まとわぬ裸に、赤い首輪だけ付けた姿は……すごくエロティックだった。
「……これって」
「俺ん家にいる間は、取るなよ」
上村くんは命令口調。だけど顔は笑ってる。
「……私、上村くんのペット……なの？」
「そうだよ。文句あるか？」
私の顔を間近から覗き込むようにして言う。
「……」
ちょっと考えてしまう。
上村くんてばやっぱり、私のこと牝犬扱いしてる。

だけど不思議と、不満も不安も感じなかった。
知っているから。
上村くんは人間に対してはちょっとぶっきらぼうで、乱暴なところもあって。初めて同じクラスになったときは恐い人かと思ったけれど。
だけど犬には——特に自分の飼い犬にはとっても優しいって、知ってるから。
だから、不安はない。
ラッキーと一緒に、ラッキーと同じくらい大切にしてもらえるんだって信じてるから。
それを嬉しいって思う私は、やっぱり変なのだろうか。
でも、上村くん公認でラッキーの彼女になれるんだし。
床の上に伏せているラッキーを、ちらりと見た。
私とセックスした後いつもそうするように、目を細めて幸せそうな表情をしている。
うん、いいかも。
だけど、一つ気になることがある。
「私……ただのペット、なの？」
「まさか」

なに寝言いってんだバカ――と口には出さなくても、顔がそう言っていた。
「やることはやるに決まってるだろ。俺が知ってる中では、委員長のが一番気持ちイイもんな。ラッキーのものは俺のもの、さ」
あ、やっぱり……するんだ。
そうか、しちゃうんだ……。
「委員長、嫌なのか？」
「……」
実をいうと、私が考えていたのはまるで逆のことだった。
私はラッキーのことが好きだし、彼とのセックスは最高に気持ちいいんだけど。
先刻の上村くんとの行為も、それに劣らず感じてしまったから。
私ってば、欲張りだ。とっても気持ちいいことしてくれる素敵な男の子を、二人とも欲しがっている。
「委員長？」
私が黙っているせいか、上村くんがどことなく不安そうな声音で訊く。その時になって、今さらのように気付いた。
ひょっとして上村くんも私のことが……って、考え過ぎかな。
だけどあの上村くんが、自分の気に入らない女の子をラッキーの彼女にはしないだろうし。
少なくとも、好意は持たれているはず。
「なあ、委員長」
「んふ……、わん！」
私は背伸びをすると、ラッキーがいつも私にそうするように、上村くんに対して口をペロペロと舐めるようなキスをした。
もしも私に尻尾があったら、それをぱたぱたと振っていたことだろう。

閲覧に関する注意事項

このＰＤＦファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

●モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Ｅｎｔｅｒキー（Ｒｅｔｕｒｎキー）で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合（１２８０×１０２４以上）、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、１ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの方が適しているかもしれません。（その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです）どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

●印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはＢ５を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「２ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。（縮小してＢ６用紙に印刷するのでも可）

アクロバットのバージョンが４の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われますのでご了承ください。